

◆ 目次

自立支援のための福祉用具ハンドブック

I 総論	1
1 はじめに	2
2 概要	3
(1) 選定における思考過程	3
(2) 平成24年度介護保険法改正について	9
(3) 福祉用具サービス計画書	10
(4) 事例から考える「福祉用具サービス計画書」記入例	16
(5) 「福祉用具が必要な理由」と「福祉用具利用目標」及び 「選定理由」の関係性	19
(6) ケアマネジャーと福祉用具専門相談員等の連携	22
II 福祉用具の紹介	25
1 車いす	26
2 車いす付属品	36
3 特殊寝台	40
4 特殊寝台付属品	44
5 床ずれ防止用具	50
6 体位変換器	52
7 手すり	54
8 スロープ	56
9 歩行器	58
10 歩行補助杖	62

11	認知症老人徘徊感知器	66
12	移動用リフト	68
	移動用リフトのつり具部分	73
13	自動排泄処理装置	77
	自動排泄処理装置の交換可能部品	78
14	ポータブルトイレ（腰掛便座）	79
15	入浴補助用具	82
	簡易浴槽	85
16	住宅改修	86
17	その他（介護保険対象外）	88

Ⅲ 相談事例 99

事例 1	移乗困難によるリフトの導入	100
事例 2	特殊寝台の導入	102
事例 3	突っ張棒型手すりの導入	104

Ⅳ 資料編 107

1	介護保険の給付対象となる福祉用具及び 住宅改修の取扱いについて（解釈通知）	108
2	福祉用具関連ホームページ	117
3	協力企業等一覧	118

1 はじめに

福祉用具には個性があります。標準型の車いすでも体型によりサイズも異なり、駆動輪径も駆動輪の軸位置も異なってきます。これらの仕様を適切に選定するためには、福祉用具の利用目的を捉えた上で、利用者情報が必要になってきます。

例えば利用者の身長が160cm、体重60kgの方と、身長140cm、体重35kgの方が同じサイズの車いすでは不適合を起こしてしまいます。体格が良い方に小さな車いすを選定すると、狭すぎることにより大腿部がパイプに当たり痛みを生じることがあります。小柄な方に大きいサイズの車いすを選定すると、シートのたわみの影響を受け仙骨座りになって尾骨部に発赤が生じたり、背もたれの高さが高すぎて前屈姿勢になってしまったり、車いすをこぐ時に背シートパイプに上腕部（腕）が当たりこぎにくくなってしまうことがあります。

また使用場所と使用目的により、車いすの駆動輪径を決めることもありますし、車いす用クッションも臀部の筋肉の萎縮や座り直しができるかどうか、座位保持時間等によっても適切なものが変わってきます。

床ずれ防止用具についてはどうでしょうか。事例を基に考えてみましょう。

事例概要

全く寝返りを打つことができず、寝たきりの状態になって5年経過している事例

- ・ 臀部の筋肉の萎縮も激しく関節拘縮がある。
- ・ 食事は介助で行っているが、むせることも多く、栄養状態が良いとは言えない。
- ・ 寝返りを打つことができないため、梅雨時期から秋口までは汗も多く、便意がないのでおむつを使用している。

この方に対してマットレスを選定する時に、低機能で安価なものを選定すれば、あっという間に褥瘡じよくそうになってしまうことは誰の目から見ても明らかです。

褥瘡のリスクはOHスケール（大浦・堀田スケール）が有名ですが、この事例の場合、寝返りを打つことができず、臀部の筋肉の萎縮が激しく関節拘縮があり、高度のリスクがあるので高機能のエアマットレスが必要なケースということが言えるでしょう。

介護サービスと同様、福祉用具サービスも利用者の状況、使用状況、介護者の状況によって異なるものなので、いかに利用者及び介護者のことを知ることができるかが福祉用具の選定ミスを防ぐことに繋がるのです。

また、福祉用具を使用した後のモニタリングは「何をモニタリングするか」がとても重要です。モニタリングを行う時の会話の例から考えてみましょう。

「福祉用具をお使いになって何か問題はありますか？」という問いかけに対して、利

用者は何と返事をするでしょうか。「いいえ、特に問題はありません。」という回答が多くはないでしょうか。この問いかけでは利用者の問題意識を尋ねていることになります。問題意識として気付かないところに隠れているニーズがあるのですから、ニーズを捉えるためには不適切な問いかけと言えるでしょう。

「車いすを利用して外出頻度を増やすことはできましたか？」という問いかけはどうでしょうか。「はい、週に3回買い物に行くようになりました。」と外出頻度や外出目的を答えてもらえると、「車いすを使用して外出頻度を増やす。」という福祉用具利用目標に対して、目標を達成できたかどうかを知るだけでなく、外出目的に合った仕様や機能の車いすを選定したかどうかという視点で、さらに見直しを行うこともできるようになります。また、再度ニーズの見直しを行うこともできるようになり、**再アセスメント→再評価→目標設定→福祉用具の選定**という次の目標に対する流れをもたらしてくれることでしょう。

目標もわからず漠然と福祉用具を使用したり、目標を設定せずに「福祉用具を使用すれば解決するだろう。」という安易な使用では、福祉用具を有効活用することはできません。

福祉用具の機能を活かすためにも、**利用目標の設定**となぜそのタイプのものを選定したかという**選定理由**をきちんと福祉用具専門相談員が説明し、その利用目標と生活全般における課題及びニーズに対応できているかなどを、**ケアマネジャーと福祉用具専門相談員が共通の認識を持って取り組むことが大切**です。

2 概 要

(1) 選定における思考過程

福祉用具の選定における思考過程は、利用者及び家族の希望があるからその福祉用具を選定するという思考過程では課題の解決を行うことができません。

例えば「車いすを貸してほしい。」という希望に対して、「どのような車いすを希望されていますか？」と機種の選定をいきなり行うことはアセスメント（分析）なしで選定していることと同じです。利用者の希望＝ニーズとしても、どのタイプの車いすが必要かというところまでアセスメントを行わなければ、真のニーズの解決にはならないでしょう。

そもそも**なぜ車いすを借りたいと思ったのか、車いすを使用してどのような生活を送りたいと思ったのか**ということを、利用者及び家族の希望を通して把握することが必要です。この流れをフローチャート（P.4図1参照）を使用して説明します。

1 車 い す

◆ 概 要

車いすは歩行が困難な方が移動するための機能だけではなく、利用者自身の足であり、身体の一部としての機能が求められています。

また、長時間座り続ける方には椅子としての機能も欠かせません。座位をしっかりと保てるようにすることが大切になってきています。

簡単に折りたためる車いすの場合、座面が柔らかいシートで作られているため、正しい座位が保持しにくいという問題点があります。また、姿勢を変えにくいために、長時間座っていると臀部に痛みが出やすくなります。

車いすに身体を合わせるのではなく、車いすを利用者の身体の状態や体形に合わせたものでなくてはなりません。例えば座幅が広すぎると身体が傾きやすくなり、自力では移動しにくくなります。最近ではモジュール型といって、身体の状態に合わせて適切なパーツを組み上げる調節機能を重視したものも増えています。座幅、座面の奥行き、車輪の位置、肘掛けの高さなども調節できます。身体に合った車いすは利用者の意識を変え、自立範囲の拡大などを促します。普通の生活に近づくことでADL（日常生活動作）やQOL（生活の質）が改善されます。

◆ 車いすの種類と特徴

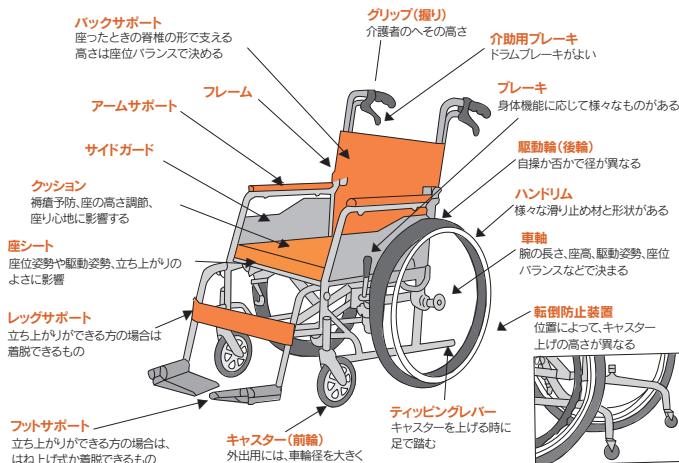
車いすには、手動と電動があり、手動車いすは誰が操作するのかという点に着目し、「自走用」と「介助用」に分類されます。

利用者本人で操作するハンドリムが付いているものは「自走用車いす」になります。一般的には「介助用車いす」には、利用者本人で駆動するための機能が付いていません。

「電動車いす」は利用者本人で操作しますが、通常、利用者の身体状況が大きく異なるため、自走用とは区別し、この3種類を大きな区分とするのが一般的です。

この他、駆動方式や機能などに着目し、「標準型」、「モジュール型」、「前輪駆動」、「片手駆動」、「低床」、「六輪」、「リクライニング」などの呼称で区別されています。

車いす各部の名称（標準型）





モジュール型車いす

利用者の身体に合わせて、車いすの各部を調整できる車いすです。

<調整ができる部分の例>

- ・バックサポート（背もたれ）の角度や張り
- ・座面の奥行き
- ・アームサポート（肘掛け）の高さ
- ・介助用ハンドルの高さ
- ・車軸の位置（座面高さ、後輪相対位置）

※機種により調整できない部分もあります。



電動アシスト機能付き車いす

介護者の押す力を手助けしてくれる車いすです。介護者が高齢の場合、周囲の環境が長い坂道や急こう配のスロープを利用しなければ外出できない場合等、電動モーターが介護者の押す力を援助してくれます。通常の車いすのようにグリップを押すだけで、力が必要な場面や下り坂の減速等を自動的にサポートしてくれます。介護者が押さなければ勝手に動くことはありません。

片手駆動の車いす

片手で操作ができる車いすです。ブレーキも片手で操作できます。

レバー式片手駆動車いす



進みたい方向へレバーをこぐように動かします。移動方向と逆側に倒すと止まります。また、横にこぐとその方向へ回転します。

ダブルリム式片手駆動車いす



麻痺のない側のハンドリムの内側に反対側の車輪を回すリムが付いていて、両方同時に回して前進します。一方だけを回すと片側の車輪だけが動きます。